彼岸花

松本　博子
（香川）

このごろの私

駅前のイオンが閉店し遠くの大型スーパーまで、運動をかねて自転車で買い物に行っている。一生懸命ペダルを漕いでいるが、若者に抜かれることが多くなった。確実に老化していることを感じる。

彼岸花里の更地の隅に咲きよう来たと吾を迎えくれたり
傾きて咲く彼岸花二本あり物言いたげと吾には見えくる
彼岸花はいかに思うや地を囲む色褪せしロープ、売地の立て札
赤錆がぽろぽろ落ちる鍬を持ち草取女（くさとりめ）となる秋晴れの日は
草取りの鍬にあたりたる石拾い手に持てば家の記憶の重さ
空家から風鈴の音が響きくる　風の誘いに鍬休めたり
作業終え草が吸いたる秋の日の匂い嗅ぎつつ袋に入れる
草取りを終えし里より帰り来ぬ目に顕ちくるは彼岸花の赤
彼岸花枯れながら色を保ちつつ果てんとするを更地に見たり
「相続土地国庫帰属制度」載っている新聞記事をくり返し読む
ふるさとのしがらみを吾は脱したく壁の地図見て仮想の旅す
春までは草取り休止見廻りは続行とする計画立てる
草取りに幾度も行きし秋の日は遠ざかり木は葉を落としたり
冬の雲流るる方に里があり澄みたる空の夕茜見る
筋書きはわかっているが今宵また「彼岸花」見て父母偲ぶ

午年の正月

義原　一郎
（鹿児島）

このごろの私

短歌は詩の一形態であるが、良い歌はひとに希望を生まれさせる歌だと思う。どんなことでも希望が生まれるように詠いたい。それが歌を作るものにとっての「生の証明」となる。コスモスで習った。

午年に「馬」の題詠　馬見しは何年前か思ひ出せない

馬一頭全姿を見ればうつくしく顔だけ見ればああ、馬のかほ

美しさ愛(かな)しいほどの競走馬騎(の)る者も観(み)る者も魂飛ばす

馬に賭け馬を駆けさせいつの間にか人馬一体ペガサスになる

「馬喰(ばくろう)」は馬を商ふ人ならず博徒を指せり徳之島弁

をりふしに雨降りさむい正月で行き来の車まばらなりけり

二日には初湯に行きて事もなき正月なりと構へずゐたり

〈震度4…〉〈ベネズエラ空爆…〉窓に氷雨の当たる音せり

大学駅伝に教へ子一人行きたるが控へとなりて残念無念

三日には空晴れたれば気分良し明日まで三十首と意気込みにけり

日が照ればたちまち元気とりもどす木々の青葉もわれのこころも

われに代はり正月客の接待を一人でこなす妻は頼もし

四日の日の墓正月も妻一人行かせて歌詠むわれは何者

歌出来ず鬱屈とした日の暮れは「コスモス」の森で散策をせり

カラオケが文化となりて半世紀〈コロナ〉の後を復活したり